ヒューマンライブラリーの実践と学生への教育効果
－多様性の理解を目指す試みとして－

関　久美子・岩森三千代・池宮真由美[1]・佐藤　裕紀[2]

On the Practice of Human Library and Its Educational Effects on Students: As an Attempt to Understand Diversity

Kumiko Seki　Michiyo Iwamori　Mayumi Ikemiya　Hiroki Sato

１．はじめに

新潟青陵大学・新潟青陵大学短期大学部地域貢献センターでは「ふわりとつつむ」をテーマに地域の多文化共生を目指し、さまざまな障がいやセクシャルマイノリティなどに焦点を当て「インクルージョン講座」を開催してきた。言うまでもなくこの地域社会にはそれ以外にも多様な背景を持った人々が存在しサブカルチャーを数多く形成しており、目指すところはマジョリティ、マイノリティ、そしてサブカルチャー同士が互いに理解し尊重しあえる真の多文化共生社会の実現であるが、それは容易とは言えない。残念ながら、自己とは異なった背景を持つ他集団あるいは他者に対して無意識的にステレオタイプや時として偏見を抱いてしまうことは否定できない。今回、同センターは、社会に存在する多様性を理解し、自己の偏見を自覚し、その低減に資することを目的に掲げ、今までの「講座型」ではなく「参加型」の学びの機会として、「人を貸し出す図書館」であるヒューマンライブラリー（以下ＨＬと略記）を「あなたを知って私を知りたい～ヒューマンライブラリー@SEIRYO」と題して開催した。本稿では、同大学で初開催となったＨＬ、そして同大学図書館との共同企画展示の実践報告とともに、ＨＬの運営に携わった学生においてどのような教育効果が期待できるか考察する。

２．ヒューマンライブラリーとは

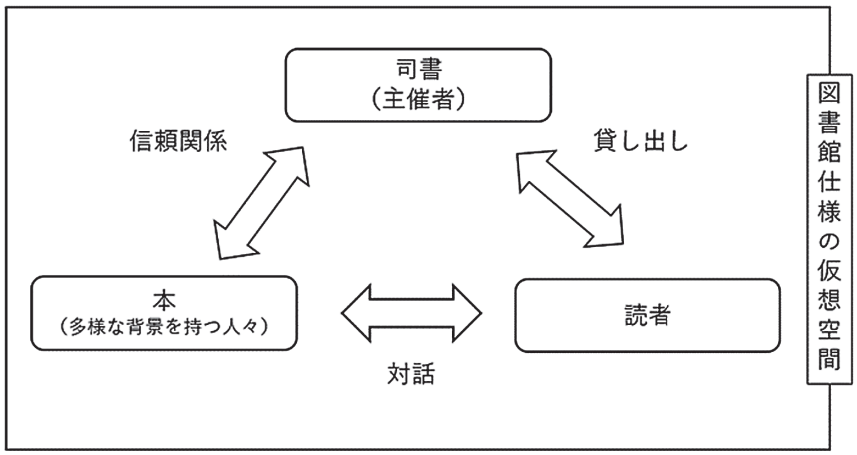
ヒューマンライブラリーは、「障がいをもっていたり、人種的なマイノリティであったりすることで人々から近づきにくいと思われたり、偏見を受けやすい立場にある人が、『本』となって30～45分程度貸し出され、『読者』は１対１で、あるいは１対数人でその『本』の語りに耳を傾け、対話がなされるという特別な『図書館』（イベント）である」（横田2012, p.155）。偏見を低減することや、心のバリア

[1] 新潟青陵大学新潟青陵大学短期大学部図書課主任
[2] 新潟医療福祉大学健康科学部助教

を溶かす、多様性に寛容な心を育てる等の実践的なイベントとして各地で行われている（坪井 2017.p.65）。

ヒューマンライブラリーの構成を図で示すと【図１】のようになる。ヒューマンライブラリーは図書館仕様の仮想的空間である。まずイベントの来場者（読者）は、受付で入館手続きをして読書カードを取得する。この読書カードを取得するためには、イベントの趣旨を理解し、本を意図的に傷つけないことや、個人情報を漏えいしないことなどの決まりが記載された同意書へのサインが必要となる。

同意書にサインをして読書カードを取得すると、パネルへの掲示やファイルに収録された形で、当日借りることができる、多様な背景を持った「本」を紹介したあらすじを読む。あらすじを読み、興味を持った「本」を選び、指定された時間にその場所に行くことで、生きた本と30分間の対話を行う。通常、この対話は1対１ないし少数で行われる。そして、読者に予備知識は不要であり、誰でも無料で参加できる敷居の低い催しとなっている。



【図1】ヒューマンライブラリーの構成
（坪井（2017）p.67の図を筆者一部修正）

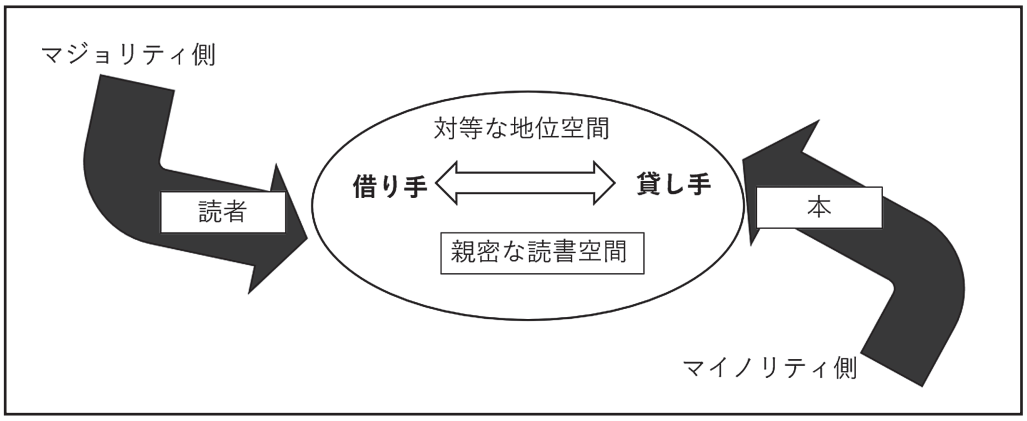
このヒューマンライブラリーは、2000年にデンマークのNGO（Stop the Violence）が、北欧最大のロックフェスティバル「ロスキレ・フェスティバル」にて始め、その後欧州を中心に広がり、現在では90か国以上で実施されている。また日本においても、2008年に京都の「ATACカンファレンス2008」で東京大学先端科学技術センターが開催したのを契機として、大学、市民団体を中心として広がりを見せている。近年ではメディアに掲載されることも増え、高等学校での英語の教科書でも紹介をされている。そして、2017年には各実践者のネットワーク、研究そして情報発信機関として日本ヒューマンライブラリー学会が設立されている。

３．ヒューマンライブラリーの意義

ヒューマンライブラリーの意義として、例えば、偏見の低減効果があるとされている。私たちは、社会で生きていくために、特定の特徴に着目して人をカテゴリー化し、情報を単純化・整理することで負担や時間を節約している。この際に、しばしば、集団や社会的カテゴリーへの誇張された画一的なイメージを生み出し「ステレオタイプ」形成の基礎となってしまうこともある。さらに、人は自己高揚動機を持っているため、自分の所属している集団をそれ以外の集団よりも優れていると思いたく、「内集団びいき」現象が生じることもある。そこから偏見や差別が生成されていくこととされている（加賀美他 2012）。

では、ある意味、人々が社会の中で生きていく過程で自動的に生成されてくる偏見を、いかに低減することができるのか。最も有名な偏見低減の理論として、「偏見は無知や誤解に基づくものであり、接触を通じて相手集団の実際の姿を知ることで改善される」とされる接触仮説がある。

この点で、坪井（2017）によれば、ヒューマンライブラリーの演劇的仮想空間には、①「対等な地位」（本役と読者役、同意書）②「共通する目標」（読書して理解する）、③「制度的支持」（人間図書館という仮想空間）、④「親密な接触」（少人数での対話）といった、偏見の低減のための「接触仮説」における効果的な接触条件が全て満たされており、未知の他人同士の心理的距離を30分間で近づけ、偏見の低減や異文化理解を促進する仕掛けがあるとされている（【図２】参照）。



【図２】ヒューマンライブラリーにおける偏見低減の構造
（坪井（2017）p.69の図を筆者一部修正）

ＨＬ実施による「読者」の偏見の低減効果（横田・坪井・工藤 2018）、ＨＬによる「読者」の異質な他者の受容や視野の広がりなど異文化間能力の向上（坪井2017）、「本」が語りによって自分自身の経験や生き方を再構築するナラティブ効果（菅原・照山 2018）、「司書」として学生が運営に携わった際にアクティブラーニングの面で効果的である点（工藤 2012、横田 2018）などが、ＨＬの意義、効果として明らかになっている。

また、当事者の語りを自助グループから外へと届ける点、マイノリティの存在の声を可視化する点、地域資源・人材の発掘、交流という点、コミュニティの中で接点の少ないグループ間の橋渡し機能の点などで意義があると考えられる。

４．ヒューマンライブラリー実践報告

４－１．「ヒューマンライブラリー立ち上げ準備講座」開催

前述の通りＨＬは世界90か国に広がっており、日本でも特に最近では積極的に開催されており、メディア[3]でも取り上げられている。新潟では本稿の筆者の一人である佐藤が平成27年に一度開催しているが、その知名度はまだ低いため、地域貢献センターでは平成31年10月のＨＬ本番開催に先駆けて、平成30年６月に「ヒューマンライブラリー立ち上げ準備講座」[4]と題して公開講座を実施し、学生、一般を含む

[3] NHKニュース「おはよう日本」：https://www.nhk.or.jp/ohayou/digest/2017/12/1206.html

[4] 2018年６月23日（土）「ヒューマンライブラリー立ち上げ準備講座」主催：新潟青陵大学新潟青陵大学短期大学部地域貢献センターインクルージョン講座　講師：佐藤 裕紀（新潟医療福祉大学）ファシリテーター：関 久美子・仲 真人（新潟青陵大学短期大学部）

80名が受講した。この講座では、まず初めにＨＬとその仕組みの紹介、ＨＬの意義についての講義を行い、その後受講生はＨＬにおける「読書」のデモンストレーションを見学し、最後に「本」「読者」そして受講生が自由にディスカッションを行った。

「読書」のデモンストレーションにあたり、中途視覚障がいを持つA氏、発達障がいを抱えながらも創作活動を続ける娘を持つB氏、トランスジェンダーとして女性から男性となったC氏のそれぞれ異なった背景を持つ３名の方に「本」役としてご協力いただいた。また「読者」役は地域貢献センター員、教職員他、受講生からのボランティアを募り、１名の「本」につき２～４名ほどの「読者」が「本」と対話する形をとった。「読書」のデモンストレーションは1セッション30分とし、受講生は３グループに分けられ、３名の「本」のうち指定された２名の「本」の「読書」を見学した（【写真①講義】【写真②③「読書」デモンストレーション】参照）。

【写真①】

【写真②】

【写真③】

受講生からは「『本』３名全員の『読書』を体験したかった」、「30分は短い」と言った声があがったがこれらは想定内であり、「もっと知りたい」「より深く理解したい」という欲求が表面化したものと考えられる。また、一対多数の講演会形式ではない、「対話」を基本としたＨＬの意義には多くの賛同があり、ＨＬを周知する良い機会となった。

４－２.「学生司書プロジェクト」とヒューマンライブラリー開催に向けて

日本国内で開催されるＨＬは大学のゼミ単位、ないしは有志学生を募ってアクティブラーニングの一環として行われているところも多く、また学生への高い教育効果も報告されていることから（工藤 2012、横田 2018）、今回のＨＬでも学生の有志を募り「学生司書プロジェクト」[5]を立ち上げた。新潟青陵大学から臨床心理学科４年生２名、社会福祉学科３年生１名、看護学科１年生１名、新潟大学短期大学部から人間総合学科２年生３名（ゼミ活動として参加）、１年生４名、幼児教育学科２年生１名、そして今回のＨＬ開催にあたり企画協力いただいた新潟医療福祉大学から社会福祉学科３年生１名、２年生２名、医療情報学科２年生２名、合計17名の学生が「学生司書」としてＨＬ開催に向けて、①「本」の選定、②「本」の方へのＨＬ趣旨説明・参加依頼、③「本」の方へのインタビュー、④「本」の「あらすじ」作成、⑤ＨＬの準備と当日の運営を行った。以下、時系列でＨＬ開催までの経緯を報告する。

６月の「ヒューマンライブラリー立ち上げ準備講座」終了後、「学生司書プロジェクト」の第１回目の合同勉強会を開催した。最初に平成30年５月に開催された早稲田大学SDCヒューマンライブラリー[6]に「読者」として参加した学生２名からその報告がなされ、次にどうような「本」がＨＬに必要か、ま

---

[5] 2018年度新潟青陵大学短期大学部学長教育改革助成金事業として採択。

[6] 2018年5月26日（土）「早稲田SDCヒューマンライブラリー ～話して発見、広げて価値観～」https://www.waseda.jp/inst/icc/news/2018/03/05/8210

たどのような「本」を読んでみたいかなど話し合いを行った（【写真④～⑥合同勉強会】参照）。

【写真④】

【写真⑤】

【写真⑥】

７月～９月中は各大学でのミーティングを重ね、ＨＬのタイトルを「あなたを知って私を知りたい～ヒューマンライブラリー@SEIRYO」と決定した。また学生の意見も取り入れながら教員がＨＬ企画書と「本」への依頼書を作成した。企画書では今回のＨＬを実施する狙いを「多文化共生の地域づくりに向けた多様な人々をつなぐ学びの場をつくり」とし、具体的には下記のような目的を設定した。

来場者（読者）にとって

・普段なかなか接点のない人々との対話を通して、自分の視野を広げ、多様な価値観や文化的背景への受容や、自分自身の中にあるステレオタイプな見方、誤解や偏見に気づく機会。

本役の語り手にとって

・自分の中にある属性・要素によって誤解されたことや「生きづらさ」「生きにくさ」を感じた経験や、本当の姿を、自分のライフストーリーと共に伝えることで、誤解やズレを低減する機会。
・自分自身のこれまでの経験を他者に伝え語り合う中で、自己像が前向きになる機会。
・本役同士や読者との多様なネットワークを持つ機会。

地域社会にとって

・読者と本が互いの共通点や差異に気づくと共に、自分たちが生活する新潟という地域や社会での、多様な人々が暮らしていく上でのバリアについて理解を深め、社会自体の「多様性」に対する感性を高める機会。
・同じ地域・社会に暮らしながらも接点のない人々同士の橋渡しとなり、新潟の「人の魅力」を再発見する機会。

企画書、依頼書のもと、教員、学生のネットワークを通して「本」の候補へコンタクトを取り、直接会ってＨＬの趣旨を説明、また「本」としての参加依頼を行った。リスクマネージメントの観点から、原則として初めて会う場合は教員が会う、ないしは同席するとし、すでに教員と面識がある方、学生の知り合の場合は学生が説明・依頼を行うことを許可した。依頼においては、新潟ではまだＨＬの知名度が低いことから、まずはＨＬのイメージを伝えることに苦慮した。また「読書」では「本」からのある程度の自己開示が必要となるため、その旨も慎重に伝えた。加えて「本」役には一律3,000円の交通費支給を条件に依頼した。また、６月の「ヒューマンライブラリー立ち上げ準備講座」の受講者の中からも「本」役として手を挙げる方も含め、結果、期待以上にＨＬの趣旨に賛同いただき、教員、学生も含む21名から「本」として協力を得る結果となった。

次に、参加依頼を承諾した「本」の「あらすじ」を作成した（【資料①～②】参照）。これが「学生司

書プロジェクト」の根幹となる課題である。「あらすじ」とはタイトル、サブタイトル、「本」の属性を表すハッシュタグ、「本」役を紹介するあらすじ本文、そしてあらすじ作成を担当した学生からのコメントで構成されている。「あらすじ」はＨＬ当日会場に掲示され、これらをもとに当日ＨＬに訪れた「読者」は「読みたい本」を選択できる。学生は「本」と再度アポイントメントを取り、インタビューを通して彼（女）らのライフストーリーやそこで抱える葛藤、生きづらさ、それらを乗り越えた姿、あるいは今もそれらと対峙する姿、考え方や価値観、世界観を聞き取り、内容を学生自身の言葉で「あらすじ」としてまとめた。その後、「本」とメール等でやり取りをしながら祖語のないよう必要がある場合は修正を入れて完成させた。学生司書は共有するスプレッドシートに「あらすじ」作成の進行状況や「本」役の氏名、写真、属性、「あらすじ」内容等のSNS上や当日会場での公開許可の有無について細かく記録し、「本」のプライバシー確保にも細心の注意を払った（【写真⑦～⑨「本」へのインタビュー】参照）。

【資料①】

心の病から生まれた幸せの計算式
～新潟の笑顔を運ぶ似顔絵師～

Kacco さん

キーワード
#心の病　#K-BOX　#イラストと音楽
#生きてるだけでまるもうけ　#かわいいけど実は…

<あらすじ>

10 代の頃は応援団長をやるような活動的な学生だった Kacco さん。21 歳のとき、大きな事故にあい、生死の境をさまよったこともあるそうです。20 代後半には摂食障害や躁うつ病、パニック障害といった心の病と診断され、長い闘病生活を送ってきました。

人との接触を避けて過ごす中、旅行会社の方からパンフレットのイラストを描いてほしい、という依頼が来ました。もともとイラストが好きだった Kacco さんでしたが、そのときは、今の自分では描けない、と思い断ったそうです。しかしその方は、Kacco さんの話にちゃんと耳を傾けてくれました。

その方との出会いをきっかけに、またイラストを描くことにした Kacco さんは、それから自分のペースで、絵を描くことや人と繋がることにチャレンジしていきます。そこから徐々に心の病から回復し、今度は自分が心の病や生きづらさを抱える人たちと繋がろうと、様々なパフォーマンスをする、K-BOX という団体を立ち上げ、今ではたくさんの個性あふれる人たちとともに活動しています。

今までやってきたことすべてに意味がある、なにかに繋がっていく、と語ってくれた Kacco さん。いろいろな経験をされてきた Kacco さんだからこそ語れるお話に、みなさんも耳を傾けてみませんか？なにか大切なことが見えてくるかもしれません。

担当司書から
お話を聞くため、K-BOX さんが出演されるイベントにお邪魔してきました！Kacco さんとのお話はすごく楽しく、イラストもとっても素敵で、たくさんの魅力を持った方だなぁと思いました。Kacco さんのお話の中には素敵な言葉や考え方が詰まっています。みなさんも Kacco さんとのお話の中で新しい発見が絶対に見つかるはずです。Kacco さんとお話ができるこの機会を絶対に逃さないでください!

【資料②】

出会いが変えた、僕のいま
～障がいを持った自分にできること～

山内俊博さん

キーワード
#中途半身不随　#自立生活プログラム　#　ピアカウンセリング
#剣道部　#最近料理をしています

<あらすじ>

高校生の時に友達に誘われて始めた剣道にはまり、大学に入っても続けました。大学３年生の冬、部活の遠征の帰り道、後輩が運転する車に乗り、山内さんは交通事故に遭ってしまいます。突然の出来事で自分自身でも信じられなかったそうです。目が覚めた時には、もう病院にいました。自分の体につながる無数のチューブ。事の重大さは分かるようで分からない、それでも体を自由に動かせるように必死にリハビリに取り組みました。リハビリに励む日々、しかし元通りに治っていない自分の体。そんな最中、山内さんは気づきます。「ああ、これは障がいを治すリハビリではないんだ」と。

山内さんはそれから二度のターニングポイントを迎えました。病室で知り合った人、そしてピアカウンセリングのリーダーとの出会いです。それまで自分を責めていた山内さんですが、今まで知らなかった世界を知り、リーダーの言葉で励まされました。年々と自分の気持ちは変化して、現在は自立生活プログラムでご自身一人暮らしをする中で、同じような方をサポートしたり、障がいを持っていてもいなくても楽しく暮らせるような活動などを続けています。

「実はそんなに前向きでもないんです」と話す山内さん。知らず知らずに「前向きが良いこと」と考えてしまう私たち「読者」に、人生を歩んでいく上での貴重な気づきを与えてくれます。山内さんの話を聞いて、「私自身」を振り返ってみませんか。

担当司書から
たくさんの葛藤を抱えながらも、それでも積極的に考え悩み、行動している方です。私自身も打ち合わせの際、そんな山内さんの心や行動の変化に親近感を抱き、また尊敬の思いも同時に持ちました。質問をしてもっと山内さんのことを知りたいと思いました。山内さんのこれまでの人生観などを聞いてみるのも皆さんにとってひとつの出会いに繋がるのではと感じ、今から期待が膨らみます。

【写真⑦】

【写真⑧】

【写真⑨】

４－３．ヒューマンライブラリー顔合わせ・リハーサル

ＨＬ本番を目前にした10月初旬に青陵にて「本」と「司書」の顔合わせ会も兼ねた「読書」のリハーサルを行った。「本」13名、「学生司書」９名、教職員スタッフ他５名、合計27名が参加した。「読書」は一方的な講演会ではなく「対話」を基本とすることから、ある程度「読者」からの発言や質問を促すこと、そして全体の流れのコントロールは主に「本」が行わなければならない。大まかな進行として、最初の10分は「本」が自己紹介も含めて自分のことを話し、あとの20分は自由な「対話」の時間として「読書」のリハーサルを行い、その後参加者全員でディスカッションを行った。「30分という『読書』の時間は短い」「あっという間の楽しい時間だった」という所感とともに、「無理に30分で話を完結させる必要はないのでは」「30分ではすべて語ることはできず『読者』にモヤモヤ感が残るかもしれないが、それが現実なのでは」という意見が出た。また逆に「『読者』からあまり質問が出ず、時間を持て余してしまった」というような声も聞かれた。その場合は「『本』から『読者』に質問をしてみてはどうか」「『読者』に、敢えて『質問しづらいと思う質問』はどのようなことか聞いてみることで、自分たちに向けられたステレオタイプを聞き出すことができるかもしれない」など活発に意見が交換され、本番に向けた大変有意義なリハーサルとなった。

４－４．「あなたを知って私を知りたい～ヒューマンライブラリー@SEIRYO」開催

平成30年10月14日（日）、「あなたを知って私を知りたい～ヒューマンライブラリー@SEIRYO」[7]の本番を迎えた。当日は12時より受付を開始し、「読書」は12時30分から17時までの間30分ごとの7セッションを用意し、セッションごとに15分の休憩時間を入れた。「本」は原則７セッション中４セッションに参加、当日は20冊21名の「本」うち１名の不参加があったため、19冊20名が「本」として参加した。「本」のリストは以下の通りである。

	タイトル	キーワード
A	見えない世界から大きな世界を見る ～視覚障害の新潟市議として～	＃中途視覚障害
B	この子が地域を繋(つな)ぐんです ～障がいをもつ我が子を通じ、分かったことは…～	＃障がい児 ＃お父さん
C	心の病から生まれた幸せの計算式 ～新潟の笑顔を運ぶ似顔絵師～	＃心の病
D	今が一番楽しい！ ～適応障害を持つバラドル～	＃適応障害　＃うつ病 ＃バラドル
E	水俣病を次の世代へ ～被害者支援を通して伝えたいこと～	＃新潟水俣病支援
F	一生懸命、生きていたの ～あの子だけの母親でいられた 41 日間～	＃白血病患者遺族 ＃骨髄ﾄﾞﾅｰ
G	逃げられる居場所、あなたの中にありますか？ ～辛かったら逃げていい。再出発はいつでもできる。～	＃うつ病　＃引きこもり ＃若者支援
H	新潟のホームレス支援 ～あさひの家って何？～	＃ホームレス支援 ＃元ホームレス
I	長男は東大生、次男は重度自閉症 ～息子達から多様性のリアルを学んで～	＃重度自閉症 ＃お母さん
J	俺！誕生！ ～今の俺がいるのは、昔の俺がいるから～	＃ひきこもり　＃自殺未遂 ＃アルコール依存症
K	見えづらい「性」の世界を見る ～ホワイトハンズ～	＃障がい者の性介助

[7] 第34回国民文化祭・にいがた2019、第19回全国障害者芸術・文化祭にいがた大会応援事業としても開催。

L	「がん」のち、晴れ ～キャンサーギフトという生き方～	＃乳がん
M	飼い人さんのお助けウーマン！ ～犬の介護士として伝えたいこと～	＃ペット介護
N	出会いが変えた、僕のいま ～障がいを持った自分にできること～	＃中途半身不随 ＃自立生活プログラム
O	これでいいのだ ～ウツと一緒に生きる毎日　さとうさん～	＃うつ病
P	ふつうの恋愛じゃなかったんだ ～裁判で知った「デート DV」という言葉～	＃デート DV ＃PTSD
Q	１％から広がる人生 ～強度行動障害と５人の歩み～	＃強度行動障害 ＃お母さん
R	女と男のはざまで ～Ｘジェンダーの自分～	＃セクシャルマイノリティ ＃X ジェンダー
S	難聴という世界 ～笑顔で「書いて」ください～	＃聴覚障がい ＃中途失聴　＃難聴
T	通信制高校のイメージを変えたい！ ～普通高校？定時制？いいえ、通信制高校出身です～	＃不登校 ＃通信制高校出身

※H は元当事者、支援者の２名

「読者」（来場者）はまず「本」を故意に傷つけない、「本」のプライバシーを厳守するといった「同意書」にサインをする。「同意書」の内容は以下の通りである。

ヒューマンライブラリーにご来場の皆様へ

本日は、ニイガタヒューマンライブラリー@SEIRYO にご参加いただき、誠にありがとうございます。皆様がヒューマンライブラリーをお楽しみ頂ければ幸いでございます。

「読者」と「本」の方々に気持ちよく交流をはかっていただくために、いくつかの規則がございます。規則にご同意いただいた上で、ヒューマンライブラリーに参加して頂けますよう、よろしくお願い致します。

【ヒューマンライブラリーの規則】

1. 本を借りることができるのは原則 30 分間です。参加するセッション数に上限は設けておりませんが、同時に複数の「本」の予約はできません。1 冊読み終わってから、次の「本」のご予約をお願いいたします。
2. 興味本位、または誹謗中傷目的での「本」が傷つくような質問・言動はお止めください。「本」の方が身体的・精神的に苦痛を感じ継続困難になられた場合は、理由を説明することなく「貸し出し」を中止することがございます。
3. 「本」および同席者に無断での写真撮影、録音、録画は禁止となっております。
4. 当日知り得た「本」の方の個人情報はお守り下さい。ブログや SNS 等インターネットでの誹謗中傷や、個人を特定できる内容の公開もお止め下さい。
5. 危険物の持ち込み、抗議活動、暴力行為等、一般に迷惑とされる行為はお止め下さい。

【その他】

・ 貴重品等は、各自での管理をお願いいたします。
・ アンケートを実施しております。お手数ですが、ご協力をお願いします。
・ 記録用に写真撮影が入ります。不都合のある方は、受付スタッフまでお申し付けください。
・ ご不明な点等ございましたら、スタッフまでお気軽にお問い合わせください。
・ ご記入いただく個人情報は本イベントの運営の際してのみ使用させていただき、イベント終了後、速やかに破棄いたします。

「同意書」と引き換えに「読書カード」を受け取り、掲示してある「あらすじ」を読んで、受付にて「読書カード」を提示、読みたい「本」の予約をする。時間になったら「読書」の会場へ行き、学生司書の誘導のもと所定の席につき「本」と「読書」（対話）をする。同時に複数の「本」の予約はできず、「読書」終了後、15分間の休憩時間を利用し、次の「読書」の予約をするという形で行った。また「本」1名に対して、「読者」は最大６名までとし、少人数での「対話」を重視した。ＨＬによっては、「本」のプライバシーを守るために「読書」の空間を「本」１冊につき一部屋と完全な個室に設定する場合もあるが、今回のＨＬでは特にそのような配慮の要望もなく、加えてＨＬを「本」の苦悩や葛藤だけに耳を傾ける固く重苦しいものではなく、「違い」を前向きに捉え互いの理解に繋げていくために、カフェのような明るくリラックスできる空間になるよう、「読書」会場は60名程度がゆったりと使えるアクティブラーニング用の講義室２室、定員50名程度の中講義室２室に「読書」のテーブルを複数設置したオープンな空間とした（【写真⑩「あらすじ」掲示板】【写真⑪「読書」会場】【写真⑫「読書」の様子】参照）。

【写真⑩】

【写真⑪】

【写真⑫】

当日は84名が「読者」として来場し、また「本」や「学生司書」も時間が許す場合は「読書」に参加したため、合計で100名以上が「読書」を体験した。また「読書」の他に下記の通りワークショップや講演会も同時開催した。

ワークショップ「超・幻聴妄想かるた」[8]

講師：世田谷就労継続支援B型事業所ハーモニー施設長　新澤　克憲氏

時間：１回目　13：15～13：55　２回目　14：45～14：25

定員：各15名

ミニ講演会１「障害者の性やセックスワークで誤解されていること」

講師：一般社団法人ホワイトハンズ代表　坂爪　真吾氏

時間：14：00～14：40

定員：50名

ミニ講演会２「ひきこもりって悪ですか？」

講師：NPO法人新潟ねっと代表　村山　賢氏

時間：15：30～16：10

定員：20名

[8] 医学書院出版。世田谷就労継続支援B型事業所ハーモニー利用者が自己の幻覚や妄想をかるたとして「幻聴妄想かるた」「新幻聴妄想かるた」「超・幻聴妄想かるた」と現在は第三段まで制作、販売。第一段は医学の質・安全学会で「第6回あたらしい医療のかたち賞」受賞。

その他にも会場では「本」役の関連著書や物品の販売ブース、資料無料配布ブースなども用意し、会場全体が賑わいのある雰囲気となった。（【写真⑬ワークショップの様子】【写真⑭ミニ講演会の様子】【写真⑮会場の様子】参照。）

【写真⑬】

【写真⑭】

【写真⑮】

今回のＨＬでは「難聴」という属性を持つ方が「本」として参加しており、新潟市障がい福祉課よりパソコン要約筆記者を派遣してもらう予定であったが、当日は市内で多くのイベントが重なっていたため手配できず､手書きでの要約筆記者を２名派遣していただいた。また情報保障という観点から「読者」として来場する方にも必要があれば主催者側から手話通訳や要約筆記の派遣を市に依頼する旨告知したところ、４名の希望者があり、そちらにも合計４名の要約筆記者を派遣していただいた。講演会とは違い、ＨＬは「読者」が、ＨＬ当日に「あらすじ」を読んで自由に「本」を選び、比較的長時間にわたり移動を繰り返して「読書」に参加することから、その柔軟なスケジュールに希望通りの要約筆記者をつけることは難しい。今回は希望者に事前にある程度のヒヤリングを行い、同市障がい福祉課の理解と協力のもと派遣の詳細なタイムスケジュールを作成したが、今後のＨＬ開催において検討しなければならに事項のひとつである。

５．アンケート結果

５－１．「読者」アンケート結果

「読者」として参加した来場者に対して、選択式・記述式の16の設問で構成されるアンケートを実施した。回収数は84名中46名、回収率は57.5％であった。ここでは特筆すべき事項のみ報告する。

「読者」の年齢は会場が大学であったためか「10代」の30%が最も多く、次に「40代」20%、「20代」17%、「50代」15%、「30代」７％、「60代」７％、「70代」４％であり、うち「女性」が72%と大多数を占めていた。10代から70代まで、世代間で差がみられるとはいえ、すべての年齢層の「読者」がいることからＨＬが幅広い年代にアピールする取組みであることが分かる。ＨＬへの参加の理由として（複数回答可）、「内容に魅力を感じたから」が59%と最も多く、次に「自分にとって関心あるテーマの『本』があったから」が46%、「企画の趣旨、目的に共感したから」が43%であった。今回のＨＬで何冊の「本」を借りたかという問いに対し、約半数の49%が「３～５冊」と回答し、42%が「１冊～２冊」、９％が「６冊以上」借りたと回答した。「ＨＬに参加したことで考え方に変化があったか」という問いに対して、「とても変化があった」が32%、「少し変化があった」が55%と、全体の9割に近い「読者」の内面で、何かしらの気づきや心の変動があったことが分かる。「またＨＬ参加してみたいか」の問いには、「ぜひ参加したい」が64%、「都合がつけば参加したい」が36%で、「読者」の全員に今後のＨＬ参加への意欲が見られた。

次に記述式の設問に対する回答の一部を抜粋して報告する。

設問：対話前の「本」への捉え方と、対話後の「本」への捉え方に変化があればその内容を教えてください。

- ちょっとのぞいた程度です。もっと知りたくなりました。
- LGBT について、対談前とその後ではその知識が広まりました。LGBT の活動について興味を持ちました。
- 自分との共通点が何かしらあるということ。
- 生き方には違いがあっても、共感できるところが多くあった。
- 病気と一括りにして見ていたが、個人として見ることが大切だということ。
- 個性って大事。
- 同じ人間としてフラットに捉えて対話できるようになった気がします。
- 正直偏見をもっていた分野もあったけど、勉強になりました。
- （前）交流には深入りをしていけないと感じておりました。（後）「本」になられている方は決してその体験をお話したくないわけではなく、我々に話そうとしてくださっていることを本日の貸し出しにより理解できました。
- 生の声を聞くことでリアルに感じることができた。
- 自己開示するという勇気に拍手したいと思いました。

設問：ヒューマンライブラリーに参加したことで、あなたの考え方に変化はありましたか。

- 思い込みの部分が全く違うということに気づいた。
- 知る機会がなかったことを知れた。
- 考え方を変えることで現状を受け入れられる可能性があることが分かった。
- みんなそれぞれ自分に誇りをもって生きているのだと思いました。
- 相手を自分の考えで決めないこと。
- 人の見た目や偏見などに惑わされないということ。
- 本人を見ることの大切さ、考え方がより大切だということに気づいた。
- それぞれ 1 人ひとりの個別性により意識がいくようになったと思いますし、知ることで近づけることが出来ると思います。
- 紙面上の語りではなく、生の声で話して頂くことにより、より自身の価値観に響き、今後のモノの見方・視点を変えていきたいという変化が生まれました。
- 今まで会う機会のなかった人と会って話をすることができたことで、これまで持っていた誤解や偏見が解けた。
- 私も隠していることをお話し、対話できてよかったです。
- 前向きな気持ちが出てきた。
- ヒューマンライブラリーを広めたいと思うようになった。

「読書」の前後での「本」の捉え方についての問いでは、知らなかったことを知れた、もっと知りたくなったといった新しい世界に関する知識の向上や知識欲に関するものが多く見受けられた。また自己と「本」との差異を個性として前向きに捉え、特別視することなく、そこから見いだせる共通性を発見したというもの、さらに踏み込んで「本」に対して抱いていた自己の勝手な思い込みや偏見に触れている。「読書」後の考え方の変化を問う回答からも分かるように、物事の見方の新たな枠組みを構成できたというものが多く、「読者」ごとに気づきの段階は違うが、ＨＬの趣旨である「多様性の理解」「偏見の低減」に即した変化が見られた。また「本」との個人レベルでの対話をベースとしたＨＬだからこその、「本」への親近感や「本」の自己開示に対する敬意について言及した回答もあり、物理的・精神的な近距離感

が「読者」のポジティブな気づきに貢献したことは確実である。加えて「本」から勇気をもらい、「読者」が自己開示することで感情を浄化したり、社会的な妥当性を見出したり、さらにはそこでの気づきを自己の内省に繋げるなど、ＨＬはマイノリティに対する理解を社会に広める単なる福祉的な取組みではなく、マジョリティにとっても多様な社会で生き抜くための基本的なスキルを得られる場ではないかと考える。これらの回答のみで、今回のＨＬに参加した「読者」において、横田・坪井・工藤（2018）が報告した偏見の低減効果や坪井（2017）の「読者」の異文化間能力の向上を決定づけるものにはならないが、今後さらなる量的・質的分析を行いたい。

アンケート集計をしていて強く印象に残っていること、これは筆者の主観ではあるが、記述式の設問が多かったにも関わらず、多くの回答者が自己のものの見方や考え方に向き合い真摯に筆を走らせいたことであった。ここで紹介している回答はほんの一部であり、ローデータとしては非常に大量の記述回答が得られたことを言及しておく。

５－２.「本」へのアンケート

「本」に対しても、選択式・記述式の9の設問で構成されるアンケートを実施した。回収数は20名中16名、回収率は80％であった（一部設問に関して未回答あり）。ここでは特質すべき事項のみ報告する。

ＨＬへの参加の理由として（複数回答可）、「企画の趣旨、目的に共感したから」が94％と最も多く、次に「様々な人たちに出会いたいから」が44％、「内容に魅力を感じたから」が38％、「1対1（少数）という形態に魅力を感じるから」が19％であった。新潟ではまだ知名度の低いＨＬではあるが、その本来の社会的意義を理解し、また講演会のような1対不特定多数の語り、自助グループ内での同じ背景を持つ者同士の語りではない、ＨＬだからこその多様な出会いや少人数制という深度ある対話に関心があることが伺える。ＨＬに参加したことで考え方に変化があったかという問いに対して、「とても変化があった」が40％、「少し変化があった」が27％と過半数が何かしらの変化を感じているが、残りの33％は「あまり変わらない」という回答であった。「本」の多くはその属性を持つコミュニティでのリーダー的存在が多く、講演会や勉強会などの講師を引き受ける者も多いことから、普段から社会との接触も多く、必ずしも劇的な変化を経験しなかったのではと推測する。しかし今後、「本」としての経験が積まれていく上で、何かしら「本」にとって有意義な変化が生まれることを期待したい。また「本」としてＨＬに参加してみたいかという問いには「是非参加したい」が75％「都合がつけば参加したい」が25％と、全員が次回のＨＬ参加への強い意欲を持っていることが分かった。

次に記述式の設問に対する回答の一部を抜粋して報告する。

設問：ヒューマンライブラリーに参加したことで、あなたの考え方に変化はありましたか。

- 理解のある方が案外多いことが嬉しかった。
- 聴覚障害者のコミュニケーションの考え方をちがう視点から見てくれて新発見だった。
- なかなか人と話しをすることが出来ない人だったのですが、皆さんと話すことで楽しいという気持ちになれました。
- 普段出会えない方々と「本」という共通点から楽しく会話ができた。前向きになれた。多様な価値観を共有できたことで、今後いろいろ考えたいと思った。
- 自らの活動を再確認することができた。様々な意見、声を聞けて良かったです。
- 自身の経験等をお話しさせて頂く機会は過去にも何度かありますが、こういった形での対話を知ったことで、もっとヒューマンライブラリーに参加して自分ができることやお伝えできること、そういう機会を増やしていきたいと思いました。

設問：ヒューマンライブラリーに本として参加することの意義、価値はどのような点にあると思われますか。

- 多くの人に伝えられる。自分のことを見つめなおすことが出来る。言葉として整理できる。
- 自分の体験や考え方を伝えることで、様々な価値観があるということを読者のみなさんが考えるきっかけになる点。
- 当事者としての考え・訴えを受け止めてもらえる点。
- 本と読者の距離感が質問をしやすくしている。結果として伝えたい事の理解が深まると思う。
- 自己開示の場。
- 読者がどんなことに関心があるかを知ることができる。属性ではなく個人として理解してもらえる。
- 本である自身も過去を振り返ってみたり、過去と今の違いに新たに気づけたり、誰かのお役になれる事で自分の存在意義や価値を見出せる。

ＨＬ参加後の考え方の変化において「理解ある方が案外多い」「聴覚障害者のコミュニケーションの考え方をちがう視点から見てくれていた」など、ＨＬは本来多様な属性を抱える「本」に対する理解や偏見の低減に資するものではあるが、「本」自身も自己を取り巻くマジョリティ社会に対してある種の固定観念や誤解を持っていたこと、そしてそれが対話を通して修正されたことが分かる。「理解」は決して一方方向のものではなく、両方向で行われるべきであり、まさにそれが実現された興味深い事例である。また「前向きになれた」「自らの活動を再確認」といった記述から、今回のＨＬでも菅原他（2018）が報告した「本」が自己の経験や生き方を語ることによってそれらを再構築するナラティブ効果があったと推測できる。加えて、単に自分の抱える属性を知識として社会に伝えるだけではなく、社会を構成する一員として、かつ「個」として社会から認知され、さらに自己の発信で社会の多様性に対する理解を促すことで自己肯定感や存在意義を得られるということにＨＬの意義や価値を見出していることが分かる。「本」を対象とした研究も多く行われていることから、今後も新潟で開催されるＨＬにおいて、「読者」を対象とした研究と同様、さらなる調査・分析を続けていきたいと考える。

６．新潟青陵大学 新潟青陵大学短期大学部図書館における「展示企画」

今回のＨＬの企画の一つとして、「『本』の人がおすすめする本」と題し、ＨＬ開催当日も含めた10月１日（月）から10月31日（水）の期間、新潟青陵大学 新潟青陵大学短期大学図書館（以下、「図書館」とする）で「本」からの推薦図書の企画展示を行った。16名の「本」から、合計45冊の図書の推薦があった。

障がい者やセクシャルマイノリティ等、社会の中で誤解や偏見を受けやすい人たちの著書や推薦本、また関連本を展示することによって、正しい知識を得て、偏見の低減や相互理解に繋げること、また図書館の専門的で豊富な資料の公開と活用、あわせて、学内の学生・教職員だけでなく、地域社会で暮らす方々の新たな興味関心に繋がる図書との出会いや、人と人との出会いの場に図書館がなることを目的とした。当事者の方の推薦本を展示することによって、図書館で「図書（知識・情報）と人」「人と人」が出会い、繋がる場になることを狙いとし開催した。

方法としては、事前に一度学生司書との打ち合わせに参加し、そこで企画展示の趣旨を説明した。あ

らすじ作成時等、学生司書が「本」との打ち合わせの際に「おすすめの本」、「影響を受けた本」、「立ち直るきっかけとなった本」等を「本」に推薦してもらい、図書館に所蔵が無いものは図書費で購入し、企画展示コーナー（メディア・コモンズ内）に展示した（【写真⑯～⑰推薦図書展示の様子】参照）。図書については、推薦のあった45冊の内、図書館の選書規定に則り新たに15冊を購入し、所蔵資料と合わせ合計39冊を展示した。学生司書は二大学にまたがっており、また時期的に夏季休暇に入り、連絡を取りにくい状況ではあったが、メンバーで情報を共有できるスプレッドシートを上手く活用し、推薦図書の情報をやり取りすることが出来た。実際の展示作業は、展示架に学生司書が作成したあらすじを推薦図書と一緒に展示し、各「本」のキーワードを明るい文字で添えた。加えて、プライバシーの配慮には特に注意した。この点も、共有しているスプレッドシート上の「あらすじ」、氏名、写真等の公開の有無を参考にした。

【写真⑯】

【写真⑰】

展示期間中、またイベント当日も図書を手に取る図書館利用者やイベント参加者の姿が見受けられたが、図書館内だけでなく、受付付近やセッション会場内でも推薦図書を展示するなど、気軽に図書を手に取ってもらえるような工夫を行うことが出来れば、さらに本の方への理解に繋がったのではないかと考える。

今回の企画展示を通して図書館が、誤解や偏見を受けやすい人たちと学生、地域社会との出会いの場、また当事者について知り、理解する場となり、大学図書館として、地域社会から求められる役割を担うことが出来たのではないかと推察する。

教員と図書館が連携しイベントを実施することによって、学内外に図書館を周知する大きな機会となり、また学生、教職員、地域社会等、様々な人と係わり合いながら、新たな関係を築く貴重な機会となった。さらに、学生との協働の難しさ、また学生の積極性を引き出し、それを学生のやりがいに繋げることの難しさを経験し、考える機会となった。

次回ＨＬ開催時には、所蔵資料の展示だけでなく、当事者や学生の活動報告や自己表現の場、また様々な人たちが繋がり、活動する場を提供することなども視野に入れ、教育・研究・地域の三者が相互に連携協力し合い、良い成果を生み出す多様なスペースとして、図書館を活用してもらえるような企画を検討したいと考える。

７．学生司書への教育効果の可能性

ＨＬの効果は、読者や地域社会への効果に留まらず、主催者である「学生司書」への教育効果も大きい。

「本として依頼する協力者に対し興味をもち、その心情に共感し、現状を乗り越え前に進もうとする姿勢に対し尊敬の念を抱き、自己開示をして語ってもらうことに対し感謝する。その過程で、偏見について考える機会をもち、自分に何ができるかという社会への還元について考える。加賀美他（2012）はこのような多様な効果をもつＨＬの実践は、学生集団の自己教育力・社会人基礎力・就業力を向上させる潜在的機能をもっているとしている。この内面的変化はＨＬ前後に行ったアンケート結果の比較からも推察できた。

以下にＨＬ前、（「ヒューマンライブラリー立ち上げ準備講座」直後、「あらすじ」制作前）に行った学生の自由記述による感想を抜粋して報告する。

- ヒューマンライブラリーにより一層興味をもった。
- はじめは緊張したが、30 分では足りないと感じるくらいあっという間に時間が過ぎた。
- 最初は暗く苦しい体験ばかりが出てくるイメージをもっていたが、参加したらイメージが変わった。
- 逆境を強みに変える強さを感じとることができた。
- ヒューマンライブラリーに興味をもち、考えることで、偏見がなくなっていくと思う。
- 普段関わりのない人達からの話を聞けて参考になった。
- 日常生活では会う機会のない人達との話は新鮮だった。
- 助けを必要としている人に自然と手を差し伸べ特別視することなく関わりたい。
- 本の方は前向きで見習わなければならない。
- 暗く静かなイメージであったが、本の方がパワフルで前向きだった。
- 講演会に比べて質問しやすく聞きたいことがすぐに聞けるところがよい。
- 本の方は明るく前向きで心が強い。
- 普段自分のことを知ってもらいたいと思っている人を知ってもらえるよい機会であると思う。
- 自分の中の偏見が減ったと思った。

以下にＨＬ終了後に行った学生の自由記述による感想を抜粋して報告する。

- 人生に無駄は何一つなく、一人一人に色んな世界があるのだと感じた。
- たくさんの人と関わることが、自分自身を見直すことにつながった。
- 様々な人と出会い、自分だったらと考えた。
- 「多様な人を受け入れる」と簡単に言葉にしたり、耳にしたりするが難しいことだ。
- 自分とは違った生き方をしている人の話を聞き、そんな生き方もあるのだと感じた。
- この企画に参加し、様々な人や作業に関わり、自分の価値観が広がったと感じた。
- 同じ障害をもっていながらも、一人一人背景によって違いがある。
- 様々な人生経験を知ることで、自分自身の考えが広がった。
- 特にシャイな性格をもつ日本人には重要な意味をもっていると思った。
- 企画の趣旨を説明することや、本になってほしい気持ちを伝えることなど人に伝えることの難しさを感じた。
- 他者への理解とともに自分への理解も深まった。
- ヒューマンライブラリーを少しでも知ってもらえるよう取り組んでいきたい。
- 自分の価値観や世界の広がりを感じた。
- 自分の中の偏見に気付くことができた。

ＨＬ前とHL後に行った学生の感想を比較すると、ＨＬ前の感想では「参加したらイメージが変わった」「講演会に比べて質問しやすい」「参考になった」「新鮮だった」などＨＬという取り組みへの評価や興味・関心についての記述が多かったのに対して、ＨＬ後の感想をみると「自分自身を見直すことにつながった」「自分の価値観が広がった」「自分への理解も深まった」など自己の内面の成長に着目した記述が多かった。また、ＨＬ前の感想では、多様な背景を抱える「本」に対して「普段関わりのない人達」「日常生活では会う機会のない人達」「助けを必要としている人」と表現としており、「マイノリティ」をひとつの集団として捉え、カテゴリー化している様子がみられた。しかしながら、ＨＬ終了後に行った学生の記述をみると「一人一人に」「たくさんの人と関わる」「様々な人」と表現しており、ひとつのカテゴリーとしての見方から個人の生き方に対する共感へと変化した様子が伺われた。ＨＬ開催にあたり、「本」としての協力者と連絡を取り合い、「あらすじ」を作成し、打ち合わせを重ねる過程で、人間の多様な生き方に対する共感性が高まったのではないかと考えられる。今回得られた知見を基に、今後はさらに、ＨＬの実践による効果と学生の自己教育力との関連性についても検証を行っていきたいと考える。

８．おわりに

2019年に新潟で行われる「第34回国民文化祭・にいがた2019、第19回全国障害者芸術・文化祭にいがた大会」（2019年９月15日～11月30日）において、県が主催する事業としてこのＨＬが開催される。日本国内でも拡がりをみせるＨＬであるが、県の施策としてその意義が認められ開催されることは日本でも初めてのことである。ＨＬは社会のマイノリティや多様化する価値観に対する誤解や偏見を低減し多文化共生社会を目指すだけでなく、「読者」にとってはその多様な社会で生き抜く基本的スキルを学ぶ場でもあり、「本」にとっても自己開示を通して「理解」を促すことで、自己を明確化し社会における存在意義を見出す貴重な機会である。さらに、それを教育の場とした場合、従来のアクティブラーニングで期待される対人コミュニケーション能力、問題解決力、論理的思考力、実行力といったスキル向上だけではなく、「学生が他者と関わりながら、対象世界を深く学び、これまでの知識や経験と結び付けると同時にこれからの人生につなげていけるような学習」（松下2015、23）と定義されるディープ・アクティブラーニングの実践の場ともなり得る。今後も、さらなる可能性を秘めたＨＬを開催していくだけでなく、その意義を周知し、多くの人々がそれぞれの地域でこのＨＬを試みることをサポートしていければと考える。また、教育ツールとしても、学生が将来、多文化共生社会のけん引役となれるよう、引き続き「学生司書プロジェクト」の教育効果の検証と内容の充実を図りたい。

ＨＬはその「書庫」に魅力ある「本」がなければ成立しない。今回のＨＬ開催にあたり趣旨にご賛同いただき、「本」としてご協力いただいた方々に深く感謝すると同時に、ともに「多様性の理解」目指し、今後もさらに協働していけることを強く願い結びとする。

＜参考文献一覧＞

加賀美常美代、横田雅弘、坪井健、工藤和宏「多文化共生社会の偏見・差別－形成のメカニズムの低減のための教育－」明石書店、2012、150－220項。

工藤和宏「多様性と共に生きる―『ヒューマンライブラリー』の運営を通した『社会人基礎力』成長の物語」獨協大学英語研究、2012、71、99-118頁。

菅原早紀・照山絢子「ヒューマンライブラリーにおける対話と自己理解―繰り返し参加する「本」の語りから」異文化間教育、48、2018.8、116－130頁。

坪井健「ヒューマンライブラリーから見た異文化間能力―コンピテンシーを育てる実践の立場から」異文化間教育、45、2017.3、65－77頁。

松下佳代（編）「ディープ・アクティブラーニング―大学授業を深化させるために」勁草書房、2015、23項。

横田雅弘「ヒューマンライブラリーとは何か―その背景と開催への誘い」加賀美常美代・横田雅弘他編著『多文化社会の偏見・差別：形成のメカニズムと低減のための教育』明石書店、2012、150-171頁。

横田雅弘・坪井健・工藤和宏「ヒューマンライブラリーの偏見低減効果―アンケート調査による分析」坪井健・横田雅弘・工藤和弘編著『ヒューマンライブラリー：多様性を育む＜人を貸し出す図書館＞の実践』明石書店、2018、210－247頁。

横田雅弘「ヒューマンライブラリーで学生は何を学んだのか―『司書』として参加した大学生のレポートから」坪井健・横田雅弘・工藤和弘編著『ヒューマンライブラリー：多様性を育む＜人を貸し出す図書館＞の実践』明石書店、2018、248－271頁。